

- 1、「句読点」は、文章を書く時に付ける「、」や「。」のことです。「句読点」の付け方で、文章は生きもし、死にもします。これを比喩的に用いて、あるいはそこに隠喩的(メタファー)意味を含ませて用いている、ある事柄の表現に出合った事が今も大変心に残っています。

1人の後輩が、私の知人が上司になる教育関係の職場に就職しました。しばらくして、「彼はどうですか」と声をかけたら、ちょっと渋い表情で「彼は句読点が打てない人でしてねー」とこぼされました。ちょっと理解しかねたのですが、どうも「生き方にけじめがない」という意味以上に、一緒に仕事をしていて、常に「第三者的」で、関係存在として、一緒に生きているものへの、気遣いだとか、思いやりというか、それがちぐはぐで、責任のとり方が本当には出来ないという意味だと分かりました。人は良い人なのだけれど、チームの仕事では仲間の重荷になっているらしいのです。そのことを彼自身が感じていないことが、閉塞感を醸し出しているのです。それ以来「人生の句読点」とは自分だけの事を始末するだけではなくて、「共に生きる出会いの共同性の中での生き方」を含めたいと感じています。関係のというものは、いつも「自分中心」「自分本位」が死んで、相手によって自分が相対化される場所に、新しく生まれます。関係を持つ事は「句読点を打つことによって」、新しく、神によって与えられる創造的は業なのです。このことから、読み慣れたフィリピの聖書の言葉を想像しました。

- 2、さて、今日の聖書箇所は、フィリピの手紙のなかでも有名な「パウロのキリスト論」です。これは初代の教会で、教会の仲間がお互いに謙遜の心をもって、交わりをするようにという勧めを説いた一節に出てきます。キリストを模範にきなさいと諭したところです。そして「キリストのへりくだり」が述べられます。それは「死に至るまで」の徹底したものでした。しかし、初代の教会ではそれがすでに観念化・固定化・形骸化したので、それを破る意味で「十字架の死に至るまで」と付け加えたのがパウロだったとの指摘(青野)は新鮮な解釈です。言葉は常に固定化、観念化します。どう言い換えるかではなくて、そこで「ピリオド」(終止符)を打って、その沈黙に耐える時、次の出来事が始まります。9節の「このため」は、その句読点の先の出来事を語ります。「神によるキリストの高拳」です。「死による断絶を前提した上で」、全く新たな「あらゆる名にまさる名が」与えられます。ここには、主語の転換が見られます。十字架の死に至る道の主語は「キリスト」ですが、「高拳」の主語は「神」です。「句読点」が事柄を別けています。これは「神の句読点」です。

- 3、もう23年前にいただいた一冊の絵本のことを今思い出します。『かみさまのおてつだいーぼくびょうきでいいんだねー』(えとぶん佐原良子 同朋出版 1993) 契児君は生まれつき心臓が悪くて、三回の手術のあと、五歳でとうとう天に召されました。その子が、病気に「句読点」を打って、病院で、他の病気の子を励まし、いたわり、神様のお手伝いをする生き方に変わっていった、というお話です。亡くなったあと心臓病の親の会が出来て活動をはじめたと言う感動的物語りです。